

5月15日夜、新聞を読んでいた女房が「岡本公三もジジイになつたね」と言ったので、なんだとおもつたら、新聞に岡本公三の近影が載っていた。ほんとにジジイだった。が、同い年なので、彼がジジイならばくもジジイで女房はババアだ。

1972年にイスラエルのテルアビブ空港でテロをおこして44年が経つのを機に共同通信の取材に応じた、という記事だった。44年とはなんと中途半端な。「犠牲者には哀悼の意を表したい」としながらも「革命のためには人を殺すこともやむを得なかつた」と言っている。で、革命は、おこらなかつた。

いま、世界中でテロは拡大の一步だ。マスコミやその筋の専門家といわれる人たちが、思想や宗教、貧困、差別などがテロを招いているというようなことを言っているのを聞いたことがあるし、そういう説明は一見おおくの人を納得させるような気がするが、そういう表層的な理由の深部に、人の「死への欲動」があるようにおもえる。

人には生への欲動とどうじに、死への欲動があり、他者にたいする攻撃や、自己破壊となつてあらわれて、それが人をテロ（テロだけではないのだが）へと駆りたてているようにおもふ。生きようとするエネルギーがあるのなら、それに拮抗する死にむかおうとするエネルギーが存在するはずだから。

その昔、プラスとマイナスの粒子が相殺されてゼロになつている「なにも無い」状態、「無」すらない「無」から量子のゆらぎで宇宙が生まれた。（と量子論では言っている）

物質を構成する陽子と電子はプラスとマイナスにわかれていくように、物質にも質量と回転が逆向きの反物質があるのだが、

繋がれた手を高々と挙げてきた菌を見せて笑っている還暦をすぎた足立正生には闘士という面影はなく、レバノンで日本製の革命兵士が用無しになり、アイデンティティを踏みつけられて、ほっぽり出されたというのにこの無邪気な笑顔はなんだ、もうすこし恥ずかしがってみたらどうなんだ、とそんな印象だった。もう16年も昔の話だが。

その足立正生は日本での服役の後、本来の映画監督にもどり、岡本公三のイスラエルの刑務所での拷問の日日を題材に『幽閉者（テロリスト）』（2006年）を撮つた。

映画はイスラエルの刑務所でのシーン（土佐弁でいうと、ざつとしたセット）がほとんどで、前半は拷問に次ぐ拷問、後半は精神攪乱の過程が、岡本本人の体験を通して描かれているということだった。岡本公三役は田口トモロヲが演じていたが、前半の拷問に次ぐ拷問のシーンはよくこんな役をやつたなとおもふほどのひどさで、映画を見る前に近くの食堂でラーメンを食べて腹ごしらえして映画を見に行ったのだが、あまりのひどさにあやうくラーメンを戻すところだった。映画館で嘔吐感を覚えたのは二度目で、一度目はパゾリーニの『ソドムの市』を見たときだった。人糞を食うシーンがあつたのだが、パゾリーニのことだ、あれは人糞に似せた模造品ではなくほんものの人糞だ、とおもつたとき吐きそうになつたことがあつた。

拷問によつて「おれがおれでなくなつていく」「おれは何者なのか」という問いはそれはそうだろうし、「世界はおれを受け入れない、しかし、おれもまた世界を受け入れることができな

反物質は物質よりも存在時間がみじかいため、いまの宇宙は物質で満たされている。

あらゆる物質がプラスとマイナスで構成されているなら、人間のからだも物質で構成されている以上、プラスの感情とマイナスの感情が生成されるはずである。

生への欲動、自己破壊的な死への欲動、そして、他者にたいする攻撃的な破壊性、そんなものを人は本質的にかかえている。それが、自爆テロや、無差別テロを引きおこす要素だろう。人には理性や知性、抑止力があるとはいえ、それらを凌駕する負のエネルギーに突き動かされることもあるだろう。生成と破壊、そのふたつの要素で世界はなりたつている。

岡本公三は「日本赤軍」と称して1972年5月、イスラエルのテルアビブ空港で奥平剛士、安田安之と銃を乱射し、26人を殺し100人近くが重軽傷を負つた。奥平と安田はその場で射殺されたが、岡本は生き残り捕獲され、裁判で終身刑が確定し服役していたが、1985年に捕虜交換で釈放され、その後、レバノンで暮らしている。イスラエルと敵対するレバノンでは「アラブの星」として英雄扱いだったらしい。

1972年3月、ほくは生まれた息子にオリオンにちなんだ名前をつけた。その2ヶ月後、岡本公三は、オリオンの三つ星になる、といつてテロを実行した。

2000年、レバノンにいた日本赤軍のメンバー4人が日本に送還された。そのなかに足立正生がいた。TV中継されたのだが、そのときの印象は、白い無精髭とボサボサの頭で手錠に

疎外感、非在感は生きていればみんな抱えている問題で、それがテロの擁護論にはならないだろうし、足立正生は映画のなかで日本赤軍の三人はイスラエル兵だけを狙つたのだが、混乱したイスラエル兵が民間人を撃つた、というようなセリフを用意していたのだが、そんな自己弁護、自己欺瞞はやめて、人の潜在的な、他者への攻撃性を表に出せばよかつたとおもふのだが、革命戦士としてはそういう選択肢はなかつたのだろう。なにしろ彼らは世界同時革命を唱えて日本を捨てたのだから「革命」に執着する以外彼らのアイデンティティはなかつたのだろう。

テロの要素を個人の攻撃性におさめさせては都合が悪かつたのだろうし、そういう発想はなかつたのだろう。だからひたすらみずからの思想性にすがりつくしかなかったのだろう。

それにほくのもっとも嫌いなステレオタイプのセリフで繋がれていた映画だった。刑務所に収監され拷問を受け、精神が錯乱していく岡本の前にいろんな幻想があらわれる。が、伝説の革命家やテロリストたちのセリフがすべてステレオタイプで、足立独自の革命論理を訊くことができなかつたのが一番の残念だった。

萩野目慶子がゲリラの女リーダーで出ていたのにはつい笑つてしまつたし、その当時、NHKの朝の連続ドラマでは『どんだ晴れ』という番組を放送していたのだが、そこで主役を張つていた比嘉愛未が少年期の岡本の恋人役で出ていたのは「おっおっおっ」とおもつた記憶がある。キスシーンのおまけ付きだった。

ともあれ、人のなかで、生成と破壊は対消滅をしながらとき

どき消滅時間が長かった感情がその人を支配し、ガンジーのようにもなれば、テロリストにもなるのだ。他者を破壊する欲動、その芽はだれもが持っている。「わたしにはない」と清廉潔白さを言い募る人ほど。

岡本公三はいま統合失調症で薬を手放せないが、支援者とともにレバノンの保養地を転々としているそうだ。

足立正生は今年、カフカの原作で『断食芸人』を撮ったそうだが（まだ見ていない）。吉増剛造が本人役で出ているそうだ。

で、本棚の奥からカフカ全集を取り出して、カフカの『断食芸人』を読んだ。もつともほくの持っているカフカ全集は昭和43年のものだからだろうか、『断食行者』と訳されていた。

断食行者は檻のなかに入って断食する姿を見せて人気をほくしていたが「ここ数十年というもの、断食行者にたいする関心は甚だしく衰退した。以前は都市自ら直営で大がかりな興行をぶつことがよい儲けになったものだが、今日ではまったく駄目である。時代が変わったのだ」「ある日のこと、名前に馴れた断食行者は、娯楽を求める大衆がとつぜん自分から離れて他の見世物に流れていくのを見た。」「もちろん事実は一朝にしてそうなったわけではない。今にして人びとは遅ればせながら当時その人気沸騰のなかでよく注意しなかったややはり隠しきれずにあらわれていたいろいろな前兆のことを思いおこした。」

その後、断食行者はサーカス団に入団することになる。人気をほくしていたころ、断食行者にはひとつ不満があった

ざり継続したいとおもっても大衆の興味は40日で終わってしまいう無念さが革命側にはあったのかもしれない。

落ちぶれてサーカス団に入るといふくは、日本では革命ができないことがわかって、レバノンくんだりまで出かけ、世界同時革命を標榜せざるをえないという状況に似ているし、サーカス団でも大衆は猛獣や類人猿の厩舎目当てに押しかけるが断食行者には無関心だ。無関心なおかげで断食行者は心置きなく断食ができるのだが、断食を遂行するということは死を迎えるしかない。ほくはそんなふうにかフカの短編に革命の憂鬱をみたのだが、足立正生はこの短編になにを見てどう映画化したのだらう。機会があれば見てみたい。

カフカの短編には断食行者の死後が語られている。断食行者が死んだあとの檻には若い豹が入られた。「生きる悦びがその咽喉もとから、観衆には容易に堪えきれないほど強い熱気を吐き出していた」のだが、そこには革命を求める大衆の姿はなく、強者にひれ伏し、享楽を享受している大衆の姿があるだけだ。だからこそ、いまこそ革命を、に繋がるかもしれないが、ほくは革命よりもんべんだらりとした、どちらかという秩序や倫理がゆるやかな世界のほうが好ましいとおもってきた。極力、非倫理的、非道德的な生き方をしたいとおもってきた。革命をするために敵対する人間を殺すことよりも、享乐的で快樂的で自分勝手な息継ぎをして生きていきたいとおもって生きてきた。とうぜんサーカス団にあらたに飼育された若い豹の「生きる悦び」を見に行こうなどとおもわれない。

た。それは断食後40日もすると観客が飽きてくるので、興行主は40日を境に断食をやめさすのだが、断食行者としては「断食の最高潮という一番好調のところまで止めねばならないのか。なぜもつとこれ以上断食を続ける名誉を人は」奪おうとするのかと不満だったが、サーカス団に移ってからは断食行者の待遇は変わった。人気の落ちぶれた断食行者は本舞台ではなく、サーカス団の動物たちの厩舎の近くに置かれて放っておかれたのだ。しかし、断食行者にしてみればそれは好都合で、40日を過ぎても断食をつづけられる喜びがあったのだが、観衆が舞台の合間に動物を見ようとして厩舎のほうに集まるのだが、断食行者の檻はその手前にあり、観衆はちよつと立ち止まるだけで、関心を示すこともなく素通りし、長い年月が過ぎたあと、断食行者は断食の末、死んでしまう。

足立正生がこの作品を題材になぜ映画を撮ろうとしたのか、よくはわからないが、勝手に書かせてもらうと、70年代、日本は「革命」という幻想がひとり歩きしていた。東アジア反日武装戦線が三菱重工ビルなどの爆破を繰り返して死傷者が大勢出たとき、著名人のなかには、三菱重工で働いているものは反革命的である、と発言したりする人がいるという背景があったりして、断食行者ほどではないがある程度の支持を受けていた。それが「今にして人びとは遅ればせながら当時その人気沸騰のなかでよく注意しなかったややはり隠しきれずにあらわれていたいろいろな前兆のことを思いおこし」て断食行者も革命も、娯楽を求める大衆の支持を失っていったのだらう。たぶん革命は40日という限られた期間では成功することはなく体力のつづくか

そんな15日の夜9時からNHKで、将棋の羽生善治がナビゲーターで人工知能に関する番組をやっていた。

人工知能はすでにチェスや将棋では人間を打ち負かし、最後の皆といわれた囲碁の世界でも世界チャンピオンと称する韓国の棋士イ・セドルと五番勝負をやって4勝1敗だったらしい。もつともその1敗も、人工頭脳の暴走があり、それさえなければ全勝だったらしい。

いままでは膨大な情報を人工頭脳に覚え込ませてそのなかから最善手を選び出すようにして勝負していたのが最近は、初心者レベルの段階から自分で考えさせ、そのうち最善手を自分で見つけていく、といった具合だそうである。先の人工知能は三千万局も自己対局して知識を蓄積したそうである。

ある局面で棋士対棋士ならけつして指されない手が指されたらしい（ほくは囲碁はまったくわからないので）。そこに打つても、死んだ状態だから「意味のない手」である。だから棋士は打たないらしい。それが数手、数十手すると、その意味のない手が生きてきて人工知能はその対局に勝つのだが、意味のない手として棋士が放棄した手が最後にものをいう手だったとしたら人工知能は「構想力」を身につけているのだらうか。

その一方、負けた第4局目は予想できない手が出てパニック状態のなかで数手が指されたそうである。考えることができなかった手にたいする対応力が落ちるそうだ。

将棋でも高知城でおこなわれた将棋ソフトと棋士との対局で、永瀬拓矢六段が「角成らず」という奇手を放ったところ、ソフトがそれを認識できないということがおこった。

「角成らず」とは自分の角が相手の陣地にすすんだときは、より大きな力を得る「成り」という手があつて、斜めしか動けなかつた角が前後左右にも動ける権利を得る。百人が百人「角成り」を選択するだろうという手なのだが、あえて「角成らず」でいったら「角成らず」はプログラミングされていなくて、その手にたいして対応できず、人工頭脳が動かなくなつてしまふ反則負けということになつた。もつとも、この将棋は永瀬六段が勝てる将棋だったのでこんな奇手を放つ必要がなかつたし、それ以上にこういう勝ち方は気分悪い。

しかし、それらのバグはそのうち改善されて、いずれ将棋も囲碁も全敗という時代がくるだろう。将棋ファンのぼくとしては羽生が人工知能と指したらどんな手を指すだろうという興味がある。羽生の構想力と人工知能の構想力、どちらが勝つても負けても、その指し手のひとつひとつを楽しんでみたい。

でもほんとうに人工知能は「構想力」を身につけたのだろうか。もしそうだとしたら人間固有のものだとおもつていた「感情」や「判断力」も身につけ、そのうち「こころ」まで持つようになるのだろうか。

「感情」はいま、人と対話するロボットの開発に使われようとしてゐるし、「判断力」は自動車の自動運転に使われようとしてゐる。人間だけが「こころ」を持つてゐるなどというおもひあがりをもつ時代とはいいことかもしれないが、人工知能がこころをもつ時代とはどんな時代なのだろう。そのときまで生きていられないのが残念だ。

2009年34歳の若さで死んだ伊藤計劃の小説に「ハーモニ―」(早川書房)というのがある。個人用医療薬精製システムに繋がれた人間は病むこともなく病気で死ぬこともなくなつてゐる時代が背景だ。人間は健康が一番であるという基準で、テクノロジーに支配される世界、システムだけが優先される世界、個はシステムの一部であり個がもはや単位とはなりえない世界(そこには書かれてはいなかつたが、そういう世界はもはや性行為なしで人間がつかれてしまふのではないか、という性行為すら社会のシステムのなかに組み入れられてしまつてゐる世界)の話で、そんな優良な世界に自殺者が頻繁にはじめるという幕開きで物語ははじまる。一人の少女がそんな世界に反乱を起こし個人用医療精製システムを逆コントロールして自殺者をつくりだしてゐたのだが、結局はシステムが勝つてしまひ、優良な世界が戻ってくるという話で、最近の人工知能の発達をみてもつてしまふような小説だつた。

しかしとおもう。人の存在は本来差別されてゐる。短い命と長い命がある。苦しむ人と苦しめない人がいる。人は生まれながらに平等であるということとはそれらを受け入れてなお「人は平等である」といつてゐるのだ。金太郎飴のような人生なんてまっぴらごめんだ。